

かがやき

No.30(2016.6.10 刊行)、広報委員会編集、
県立図書館発行

特別企画 ボランティア論

ボランティア活動を続けて 68 年

広報・児童・対面各委員会
上條 哲

終戦翌年から日比谷高校入学まで

私は、昭和 22(1947)年 5 月、当時、貴重なタンパク質の確保のため、横浜本牧海岸で、毎日のように、釣りに励んでいた。

ある日、その帰り道、丘越えに、大勢の子供の声が聞えた。「おかしい、この辺には、小学校はないし、ちょっと覗いてみよう」と小道をかけ登った。そこで見た子供たちは、やせこけ、ボロ服を着て、広場で、無邪気に、遊びに没頭していた。

「これが戦災孤児たち」と直感した私は、すぐに、バラック建の事務所に入った。それは「高風園」という戦災孤児(米軍の無差別爆撃により、両親や保護者を失った幼児や児童)の保育施設だった。

施設管理者に面談した結果、衣食と医薬品が不足していることが分かった。さらに、勉強材料も無く、近くの小学校に通学できない状況と聞き、「行政は何をしているのか」と怒りを覚えた。

早速、帰宅後、父(敗戦後、初の地方選挙で県議員に当選し、意気軒昂の日々に協力を求めた。私は、「ぜひ、行政に要請し、学用品の確保、野菜市場のクズ野菜と米軍宿舎の良質な残飯の確保、米軍家族宿舎から古着の獲得をして欲し

い」とお願いした。

私は、さらに、クラスメイト数名に、「土曜日と日曜日に、児童たちに学力回復の機会を作りたい」と協力を求めた。

私は、秋葉原の電気部品店に、毎月、出かけ、鉱石ラジオ作りに励んでいたもので、その帰りに、アメ横で、アメ玉を買ってくるがあった。そのアメ玉をクラスメイトに売り歩かせて、それからの利益を孤児施設改善資金にと計画した。早速、リックサックに、いっぱい、アメ玉を買い込み、帰宅後、クラスメイトに売りに行かせたところ、すべて、売り切れた。それが旧制中学 2 年生の私のボランティア活動のスタートだった。

私は、昭和 20(1945)年 8 月 15 日の敗戦まで、米軍戦車を攻撃目標とし、自分で掘っておいたタコツボから飛び出し、爆弾を抱えて、戦車の下敷きになる訓練だけでなく、米軍上陸に備え、相模湾の海岸陣地構築の手伝いまでしていた。

戦災孤児施設にかかわった時には、母校は、空襲で、壊滅のまま、焼け残った山陰の小学校を間借りしての学習生活であり、教科書もそろっていなかった。

英語の先生は、読み書きがやっとなで、英文法も定かでなく、会話は、まったく、できなかった。私は、敗戦直後から、母の知人の二世に英会話の個人授業を受けていた。小学校に間借りしていたわが校に、たまたま、GHQ の教育担当将校がやってきた。校長は私に、「校内にいるはずの英語教師をすぐに見つけて来い」と命令した。いくら探しても見つからなかった。そこで、米軍将校に、「いま、会話のできる教師が不在なので、後日、また、来て欲しい」と拙い英語で対応した。米軍将校が引き上げた直後、英語教師は、隠れていたトイレから出て来て、私に、「良く帰してくれた、ありがとう」というありさまであった。

私は、小学校 5 年生まで、上海で暮らし、父の会社のひとや家事の女性らの中国人との上海語の会話をしていたのと、中国人の誤解を招ぬかぬように、父母との会話も中国人がひとりでもそばにいれば、上海語で対応していたため、外国人

との対話には、気楽な経験を持っていたのが幸いした。

父が、県会議員であったことも幸いし、私の家だけが残り、周囲のひとたちは、すべて、自宅を放棄させられ、その跡地に、米軍将校官舎が建ち、入居した家族たちの食事風景とおいしそうな匂いの流れ、さらに、真っ白いパンには、敗戦の厳しさとして、私には、応えた。早速、鶏を多く飼育し、生みたての卵を官舎の婦人に売りに行った。庭の水まきを引き受け、真っ白なパンを貰い、弟妹や祖母に食べさせた。米少年たちとの会話や遊びは、私にとって、良い経験となった。

戦災孤児施設へのボランティア活動は、継続し、級友も数名、協力してくれ、みなが大学卒業まで続いた。15歳になった戦災孤児の就職の世話もした。ピアノ調律師になりたいという少年を浜松の工場に世話した。いまでも、コンサートに行くたびに、「彼も70歳を超しているだろう」と思い起こす。

中学3年生の2月、級友の母親から、「都立日比谷高校の入学試験を自分の息子と受験しないか」と誘われた。「実力的に、とても、無理だ」と考えたが、もし、合格すれば、学校の帰りに、「アメ横で、アメ玉や菓子を仕入れることもでき、さらに、日比谷公会堂のコンサートにも行ける」と考え、入学願書を提出した。結果は、私がギリで合格し、級友は落ちてしまった

日比谷高校・中央大学法学部・勸業銀行

横浜市電・国電・地下鉄と乗り継いで登校に、毎週1回は、リックサックを持ち、帰途、アメ横で、アメ玉を仕入れてくる日課であった。同時に、毎週1回ずつ、日系二世宅での英会話、日本人外交官のイタリア人夫人からフランス語によるピアノレッスン、さらに、戦災孤児対策も続けていた。

日比谷高校では、菊池龍道校長が、敗戦後に引き上げてきた外地大学勤務であった学者を次々と呼び込んでの教師陣

で、おもしろい授業が続いていた。

日比谷高校の授業は、たとえば、世界史の時間には、米高校のテキストがそのまま教科書として使われ、生物の時間では、研究発表を次々に行われた。その時、私は、「失恋して胸が痛くなるのはなぜか」という内容の発表をした。

生徒の中には、後日、文壇で名を上げた江藤淳さんもいたし、大宅壮一さんの長男もいて、個性的なレベルの高い連中が多く、さすが、日比谷高校と痛感しつつ、毎日、勉強と課外活動に精励していた。

ほぼ、すべての同期生が、「東大のみが自分たちの入学する大学である」との意識がありながら、個性的な勉強をしつつ、なおかつ、幅広く、読書に励む者も多かった。1年生の秋から、NHK職員山下さんに師事し、ドイツ語の個人授業を受け、猛勉強を続け、ヘッセの単行本を読み続けるまでになった。

東大受験は、失敗し、中央大学法学部(桜井注・司法試験合格者数を評価基準に定めれば、東大法学部と同程度)に、入学した。授業には、ほとんど出席せず、図書館で、法律書との取り組みに励んだ。司法試験現役合格を展望しての日々であった。

大学2年生の夏、戦災孤児施設の帰り道、新しい教会ができたのに気づき、早速、立ち寄ってみた。日本人の牧師とカナダ人の宣教師がおり、ふたりとも無言のままだった。牧師に尋ねてみたら、彼らは、教団の命令で、赴任したばかりだが、牧師は、英会話ゼロ、宣教師は、英語とフランス語しか話せないということで、困っているところだった。ピアニストもおらず、次の日曜日の礼拝から、「どうしたらよいか」と悩んでいた牧師だった。そこで、私の虫が騒ぎ出し、宣教師の説教通訳と讃美歌の伴奏を引き受けることにした。新しいボランティア活動が増えた。次の日曜日からは、ほぼ、1年あまり、自分の教会をさぼったままの奉仕活動となった。会衆には、中学時代の級友や近所の大人たちが多く、冷や汗もの奉仕だった。

昭和 29(1954)年夏の司法試験では、16 問題中の 1 問が、どうしても、回答できず、不合格になってしまった。父が破産し、浪人もできないので、10 月 1 日に、勸業銀行(現在のみずほ銀行)を受験した。都内大学から 150 名の受験者があったが、15 名の合格者の中に入っていた。外国語試験問題ではドイツ語を選択した。

昭和 30(1955)年 4 月、札幌支店に勤務することとなった。早速、戦災孤児施設、保育園の調査をし、保育園では、おむつなどの処理に困っていることから、支店の女子職員に協力を願い、毎週末、保育園に出かけた。

当時では、初任給が低い方ではなかったが、全国的に賃上げのムードがあり、翌年から 5-10%の賃上げ闘争をすることとなり、早速、組合幹部になって、日常活動を始めた。市中銀行連合会の集会にも、欠かさず、出席し、翌年からの共同闘争への地固めに努めた。仕事も満足にできないのに、そのような活動であったため、支店長は、さぞかし、面白くなかっただろう。だが、翌年春、外部活動に出て、新規顧客獲得に成果を上げ、元気いっぱい若者として評価された。

昭和 32(1957)年 6 月、急に、社内結婚をし、周囲を驚かしてしまった。翌年には、父親になり、ますます、賃上げ闘争に力を注いだ。

昭和 34(1959)年 6 月、神田支店へ転勤し、わが母校を初め、明治大学・法政大学の学費集金には、各大学の資金担当課長に接近、集金効率向上に努めた。麻雀で、わざと負け、課長たちの懐を潤す馬鹿げた仕事にも、毎月、精励した。それも、課長たちへのボランティア活動だったかもしれない。

大磯に、外交官夫人が、混血孤児を収容する施設を開き、多くの混血孤児を保育していた。そこにも、教会の関連で、学業力補填のボランティアに出かけた。敗戦国の女性たちが戦勝国の兵士たちとの間にもうけた多くの混血孤児たちは、「これから、どのような人生展開があるのか」と懸念しつつ、奉仕に通った。多

くの混血孤児たちは、太平洋を超えて、養子になっていった。

勸業銀行退職・独立・ボランティア

私は、東京オリンピックが開催された昭和 39(1964)年、勸業銀行の従業員組合の専従を務めていた。東海道新幹線の開通 10 日後、関西オールドに出かけた。まだ、試運転に近い感じで、ゆっくりとしたものであったが、気分は、良かった。

関西支店と四国支店巡りをしていると、支店長たちから、「単身赴任で苦勞が多いので、関東地方へ戻りたいから、戻ってから、人事部へ伝えて欲しい」との依頼が多かった。彼らは、組合員ではなく、人事部へ伝言する義理も義務も無いので、聞き流しておいた。こればかりはボランティアにならない。だが、部下の不正発覚や支店の成績不振で左遷された彼らが、哀れではあった。

私が、銀行から脱サラしたのは、35 歳の時だったが、上記体験が、かなり、大きく影響していたかもしれない。

スカウトの熱心な言葉だけでなく、当時は、「35 歳人生再考慮説」もあって思い切って、脱サラし、商社勤務、次いで、プレハブ住宅会社に籍を置いて、外国巡りと全国組織づくりに力を注いだ。その後、10 年間は、ボランティア活動を継続的にできなかった。

45 歳になり、「小さくても、面白く、利益の多い商売は何か」と勘案し、家内の母親が成功していた呉服小売業を始めることにした。仕入れは、鹿児島メーカーからとし、何も知らないまま、体当たりで、鹿児島に乗り込み、仕入れ先を開拓した。奄美大島にも出かけ、メーカーから現金で買い取り、銀行時代の旧知の医者・僧侶・弁護士などの夫人たちに売りさばき、笑いが止まらぬことも多かった。

平成 11(1999)年秋、急性腹膜炎で、余命 2 日間と宣言され、入院・手術後、2 ヶ月間の休業の後、年末を迎えた。体力も気力も自信がなくなり、数ヶ月後には、廃業を決意した。多くの在庫の整理

編集後記

など、苦勞したが、これからの生きていく場所については、見当がつかなかった。

得意先だった水戸市の大手料亭の女将から、「雪は降らない、地震は来ない、台風も来ない、食べ物は豊富、住民のレベルも良いので、住む所は、世話をするから、越してきたら」と声をかけられた。それではと、「善は急げ」で、そのような経緯で、水戸市民になった。

転居後、体力が回復してきたので、早速、こども病院と茨城県立図書館へ、ボランティアの希望を申し出た。早速、行動に入った。茨城県立図書館との縁は、その時以降、14年になる。

当初、児童読み聞かせと対面朗読の仲間入りをした。対面朗読では、医師法改正により、視覚障害者も医師国家試験を受験できることとなったので、早速、挑戦したいという40歳台の鍼灸師の朗読に精励し、「腹の中では、はたして、この男は、合格するだろうか」と勘案していたら、みごとに、合格した。私も高校1年生の時には、医学部を目指したこともあったので、まことに、わがことのように嬉しかった。

水戸市内の介護施設で、高齢者たちに、認知症防止のため、また、脳梗塞の方々の回復助力になればと、三箇所、麻雀教室を始めた。他方、高齢女性の認知症対策の女性麻雀教室も開き、三箇所の水戸市施設を借りて、今日に至っている。少なくとも、週3回、多い時には、週5回、市内各所の麻雀教室を指導している。茨城県立図書館で、パソコン教室を開いていたが、現在は、市内の施設を借りて、パソコン教室を運営し、熱心な高齢者を相手に、私も毎週、パソコンの勉強に励んでいる。

茨城県立図書館の広報紙作成も委員会は、存在するものの、何も発行していなかったもので、9年前に、広報紙発行を手がけ、最近1年間は、休刊したものの、平成27年度から復活となり、うれしい次第である。

上條哲委員(広報・児童・対面朗読の各委員会委員)が通信紙「かがやき」No.26と本号に記した「ボランティア68年」の内容には驚きました。

両記事とも、実に、中身の濃い、最高の読み物です。論理的でオリジナリティの高い内容です。何事にも関心を持ち、本気に対応する姿勢は、この上なく、立派です。

上條委員は、日比谷高校卒業後、東大受験には失敗したものの、同格の法律部門で名門の中大法学部に入學し、勸業銀行(現みずほ銀行)に入行し、一時期、組合幹部にもなり、発行部数約1万部の機関誌の編集など、持てる能力をフルに発揮しました。そのため、本ボランティア会においては、論理的で、しっかりした文章が書ける数少ない人材です。

上條委員は、85歳になりますが、年齢的には介護される側のように受け止められていますが、そうではなく、1カ月の26日間、福祉や介護のボランティアに携わっている「鉄人」の部類の人間です。

上條委員は、茨城県立図書館ボランティア会の基礎を築いたひとりです。①広報委員会設置に尽力、②ボランティア室に設置されている個人別整理棚設置に尽力、③図書館・ボランティア全体会合の開催に尽力、④茨城県立図書館側への各種要望、⑤茨城県立図書館ボランティア協議会会長人事への助言など。これまでの精進と実績に対し、心より敬意を表します。

桜井 淳